



藏番號七六〇  
 藏書は如何  
 なる事情あり  
 親疎の別なく  
 沛自宅へは  
 一切御貸渡  
 不申候  
 九  
 記 治光 河石 華原 書

3118  
 5













少方わらわうこそまにこころに在あれゝ忽たちち昇ある乃なり

樂園らくえんに到いたるゝ須すも慾よく界がいはは儂せん空くう

登のぼりば三さん子のこ美女びよ三さん歩ぶと現あれゝ五ご

歩ぶを魂たま二階に小こ飛とをを理り酒醒さけ興きよう竭げつて

飯いり。熟痛くみ乃のみ狸う小監くれみ夜前やの實ま

今朝けさの虚うそ本年ことしに實まらゝ今ことし年しに虚うそなる。

百折ひやく千磨せん乃のみ詐まがをを竝ならべく千せん伏ふ萬まん態たい

虚うそなるがあらなし競あてて虚うそと費あひの争あひ

て虚うそと買かひの想おもへば世よ々々虚うそ月つきど

面おも白しろと物ものににゆりどどみみのの老らう兄けい樽づん

をを押おひの白しろ子ことと馬うま大だい酒しゆふふああやや。

省ちり解かい老らう酒しゆいいまま醒さめめはは飲の何なに故ゆゑ

省解老酒いま醒めは飲何故



あのみれ誘きをひく。呼ぶはれ。

支曲中の空へ却て招牌ふ詐なし。

虚の空をめぐるとをさしむとあらば

洪く天地乃間をらんよ日月星辰も

ちかぢくくつ守。本林羅万象虚で團

めく世界なまぎや。子もを界は

大なる虚とみ測る物の小さを

探れ其得るも甚し。余一句も出さず。

ふ揚押橋下に着ば。母師吐煙管と

取く世を鼓くまね乃ち歌て白。

埃情を實な。世の申の客

お震よりさしめらる家。飯



て又復虚乃種を下。筆以耕て  
竟了。故稿成ぬ。

又化九年壬申十二月中院本所

乃小築。欲心深まゝ了。荒を採れ

ひの。所謂金平本れ作者

式亭三馬題



毎部有  
此圖章  
須認印  
信為真





海原二

三





浮城二上





其裏

右三葉  
因直魚



のうきん御目印

# 式亭正鋪

●吉例正月二日より雲の内よりき鏡向の彩作

江戸夜多 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

御薬 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

金勢丸 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

龍樹散 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

御薬 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

少児百目 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

式亭三馬 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

柳髪新話浮世床二編卷之上

江戸戯作者

式亭三馬

戯作

藏書 記 志 記 志 記 志

浮世床 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

とこ ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

ふ ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

いと ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

何 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を

愁 ▲五十文 つかえ二十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百文 つかえ六十文 つかえひの天妙茶の茶を  
▲百五十文 つかえ百文 つかえひの天妙茶の茶を







敷く浮虚的の女房も。刀山釵樹うらうら宮世とらと紙おびえ  
 て。苗守支の雜費錢と慎む。嫁式つらる偏屈的乃姑婆も。  
 叫喚紅蓮あつと突とる人とのとひく。慳貪邪見の角  
 と折とる。こもひとりの濟度なす。南無阿彌陀佛  
 成泣下ふあつ。坐と退く世姑女房あも。克く倚とイかれ  
 坐又進む。六十有余の年紀の時代狂言の老母役者倚とぬ  
 先うと泪と俱ふ。まづ汲換る阿麗の向一葉乃檣動て後  
 まさうかりおと巫女の聲  
**神意** 天清淨地清淨内外清淨

六根清淨。上六梵天帝釋四大天王下八閻魔法王五道乃  
 冥官。天の神地の神家の内よ井乃神。庭の神竈乃神。  
 伊勢の園よ天照皇太神宮。讃岐の園よ金毘羅大  
 権現。播磨の園よ住吉大明神。大和の園よ春日大明神。  
 山城の園よ祇園牛頭天王下總の園よ鹿島香取乃  
 伊神。別々當國の一の宮氷川大明神。日吉山王。大権現。神田  
 大明神。妻忠稻荷の神。王子稻荷の神。三社大権現。日本六十  
 余州とるの神の政所。出雲の國の大社神の數九万八千











寄川中風

街くのもで折助さるのお情ぐ。尻尾をつまんで白何りて苦ん  
て。あひの晴〜と立烏帽子どのがひびきの下り後まいつ  
ら〜破〜で〜け〜と〜ま〜。借又よぶ声のさる時へ何ぞ  
ら〜ら〜と〜ら〜。け〜と〜行〜と〜ま〜。烏帽子宝の小夜を  
の〜の〜。表の服焚ゆる熱湯か〜け〜と〜と〜。奥のか三丸  
目のあ〜移〜如〜の〜。他西の者の放〜糞も。あ〜と〜糞〜と〜  
篇〜と〜。葛ら〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。  
と〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。

へ。解匠呉ご物が大根の香物の食うけ。茶麴の茶を〜と〜。  
嗅ぶ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。  
い〜の〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。  
う〜の〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。  
解味の温食も同はありぬら。佛の数を〜と〜。  
後ら〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。  
大〜の〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。  
う〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。あ〜と〜。

寄川中風































































まんざう 知りまらそくわるる 狐もまらぬ 風ど物我尋ら 猪  
 のあどけうくえびら 狐俗よ 葎葉言とさひやとへまご  
 どののがあつて 5つらの 晩きそがみて 浅ひよあつて  
 女房巨燵よあつて 大福解我食居中 2スルト 延公がニウ  
 お浮や。その用尊前うう 金我出くく せ入トりふと。  
 しうらせーまわし 其うまも 言ひまよ。二朱報と十一くせん。  
 トまが十一ととうい が出ーやと。まぐ 家うのよ 今がごぞい  
 ませんよ。算て見よう。ト 算へく 後お姫さる 日そし 且那

まんざう 七西四分二朱ごぞい ますととさつご。ころや 徳  
 てわらさやん 一やくよ 首我振く。あまし 言ひまよ 言ひまよ  
 まるうらつごめく イヤお姫さる 入らるる けあつる。  
 あまごこのお初が。そし ちうと 入半鐘が。まよととす たら  
 さんご。お姫さる ちうと 入らるる たら。こ 初や。お姫まよ。まよ  
 のがやる。近いのが ちうと 入らるる たら。こ 初や。お姫まよ。まよ  
 うらつごめく 襦袢脱放く ちうと 入らるる たら。こ 初や。お姫まよ。まよ  
 袖思 入らるる たら。こ 初や。お姫まよ。まよ



















とこころも後々然おそすことうの側力とせむのよぬの  
あつかにあら  
 く。赤井鑄光とこころも光栄だろといひむぐ。時をふり  
いかに  
 だことと金一分おんと花あ〜。イヤ笑つるの何のと入るこ  
いかに  
 そろせぬ〜とありと〜とあり。珠は赤面と  
まこと  
 ありと〜と〜とここの内が公やと〜と〜と性く。性や  
せまか  
 角とる内祝海へと直ゆり。その内は訓染がすまら  
あふん  
 脊負ゆえんどのが今の女房さ。ナト世の守とらふものも  
いかに  
 あらなるものぢやア後ら。縁の繩が何やぶ引ならてあらう

中らまゝに人の。と夕が似珠よか〜と〜と〜と。生れえ  
かたがえ  
 ぶ〜と女難の多い風とあはれをすら〜と〜と。実ふめさ。  
いかに  
 おくが女房の給が種とあ〜と〜と。切てわら〜と  
いかに  
 其の宮人丈もすまりよる〜と〜と。ぐろと刃徳のお終よか教其  
いかに  
 笑気傍輩女郎が笑〜と〜と。何〜と〜と。今度ハ切り中  
いかに  
 さ〜と〜と。ハア〜と〜と



